

W の 喜 劇

——言語時評・十三——

工 藤 力 男

地方に旅したときに立ちよる青空市や無人スタンドは、特に買うあてなしに覗いてみるだけでも興味がつきない。土地のことが聞かれるし、商札に俚言や訛りもみられる。ことは方言に限るわけではない。共通語についても興味ぶかい例に巡りあうことがある。野菜の商札の「キャ別」「白才」「Pマン」のたぐいの文字遣いである。いずれもおおらかで楽しい。とりわけ「Pマン」がいい。これらは、板切れやボール紙だから愉快なのであって、バーコードつきの包装には似あわない。

アルファベットを日本語の文字に混ぜて用いるには、お

およそ四つの方法がある。単字、字形の利用、頭文字、借音表記である。

単字の例には、番号がわりの「A・B・C」、**「**いは「相当の「ABC」、**「**甲乙丙」や**「**優良可」にかわって日本に定着した「ABC」などがある。

字形の利用では、丁字路を模したT字路が代表格で、本家を追いだしてしまった感があり、Y字路が派生し、W坂を使う地域もある。服飾関係には、U/Vネック、Tシャツ・Tバック、A/M/Vラインなどをみる。美容の世界にはO/X脚がある。交通関係で生まれたUターンは社会現象に広がり、J/Iターンも生みだした。

頭文字の例はあげるまでもない。先日まいこんだ住宅販売の広告に、「モダンWのパワWのパワWのパワW」とあった。W(ワイド)の例が多くはないことへの配慮だろうか。沼野充義『W文学の世紀へ 境界を越える日本語文学』(五柳書院 2002)は思いきった標題である。ロシア文学研究者の本だからおおよその見当はつくが、意外な感じは拭えない。説明をよむと、ゲートルに始まるという「世界文学」は、個々の民族の違いの上になつ超民族的な文学の意であつた。それに対して、多種多様な民族文学をそのまま受け入れ、読み、楽しむという意味で、初出の「ワールド・リテラチュアの世紀へ」(朝日新聞社「二冊の本」1998)を改題したよしである。

ハイテクノロジーを略した「ハイテク」を「高技」と書き、漢字「高・技」に新しい訓「ハイ・テク」を与えるという方式で、それに「昭訓」(↑昭和の訓)と名づけた。「パワ算」「パワ省熱」「パワ超市」などもある(橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇編『漢字民族の決断——漢字の未来に向けて』大修館書店 1987)。この方式では、訓よみか音よみかで迷う「牧場」などのほかに、新種が多く生まれることになる。「新顔」は「しんがお」か「ニユーフェイス」かというふうに。世界的に著名な学者の奇抜な方法は広まらなかつた。借音表記はごくわずかで、すぐに思いつくのはYシャツ、B玉、冒頭にひいたPマン、それに学園紛争華やかなりしころ見られた「K官」「K察」くらいか。もとよりこれらは全て俗あるいは私の世界の表記で、公には用いにくい。だが、そうもいえない事態が進んでいるのかもしれない。今春、ユーセンという会社名がしきりに報ぜられ、新聞には「USEN」とあつた。有線放送の会社で、Uは借音のようだが、正式な社名は知らない。

これに関連して思いだすことがある。氾濫する片仮名語が冗長で次の造語力をもたない欠点を克服するために、言語学者の橋本萬太郎さんが提案した方法である。例えば、

もう記憶している人は多くないかもしれないが、四半世紀前、昭和軽薄体と称する文体が出現した。これは「文

体」より「表記体」の名がふさわしいのだが、提唱者、嵐山光三郎さんの「昭和軽薄体とABC文体」（朝日新聞夕刊 1982.9.16）から実例をひくと、「10傷のおGさんがQQ車で」「ブルがおいCと田中角A氏」「人口A星のA画を東AKで上Aする」となる。これらは借音表記である。中日新聞の求めに応じて、わたしはそれについて感想を書いたことがある（1983.3.22 夕刊）。

嵐山さんは、新宿に「19BOX（ジューク・ボックス）」があり、六本木に「34（三銃士）」という店ができたという。喫茶店などのこんな奇抜な名前は今も目にする。これらは、歴史事項の年紀、平方根、電話番号などを覚えるための語呂合わせと同じことである。十字程度なら我慢してよんでみる気にもなろうが、これで数千字の小説でも書かれたら、とんだ迷惑である。自ら「軽薄」を演ずる遊びだが、不思議な情熱と称するほかない。これらがほどなくきえてしまったのは当然である。

これに追従する動きもあった。国鉄民営化の際、首都圏の路線の通称「国電」の新しい通称を公募した。それに応募した二万通の中から、名称選考委員会は第二十位の「E電」に決めた。新聞報道では全員一致だったという。毎日

新聞夕刊（1982.5.14）にのった有名人五人の感想は、賛成が一人、消極的な反対が一人、積極的な反対が三人である。帰宅途中の男性公務員も積極的な反対であった。つまり、賛成者が一人だけというのは、当紙の見解が反対だからであらう。現に、反対意見の反映したコラム「余録」（510）「近事片々」（514）、漫画「まっぴら君」（514）「アサツテ君」（516）が掲載された。このころの毎日新聞の日本語感覚はまだ健康だった。その日の夕刊は、朝日・讀賣の両紙も否定的な態度で紙面を作っている。朝日は、「上からじや定着しない」の見出しで「元祖嵐山光三郎さん」の談話をのせ、「私自身もE電は使いたくありませんね」と結んでいる。「E電」は、元祖さえ厭う軽薄な名づけだったわけである。

そのころ地方に住んでいたわたしには実態の捉えようがなかったが、その成り行きには関心があつた。十三年前に首都圏の住民になり、何回かこの線を利用してはいるのだが、「E電」の文字にも「イーデン」の音声にも遭遇したことがない。わたしは恥ずかしくてとても口にできない言葉であるが。

二年前の六月廿八日、夜七時、総合テレビのニュース。初めに数秒間みせた主な項目の中に、大リーグのサブウェイシリーズに関するものがあつた。画面の中央に松井秀喜選手と松井稼頭央選手が大写真され、その左側に縦書きの「W松井」がみえた。右側には「W対決」とあつたように思う。「W松井」は何を意味し、何と読ませようとしたのだろうか。

昨年の大リーグの報道で、夕刊読賣新聞に「Wソックス連勝」「Wシリーズ」(1024)という見出しの記事があつた。こちらのWが「WHITE」と「WORLD」の頭文字であることは、大リーグ通ならぬわたしにも判断できたし、「Wソックス」は他の新聞にもみることがある。かかる頭文字の濫用は苦々しい。日本のスポーツ報道の実態には、この時評の三回めで言及した。

以来、気をつけて見ているうちに、Wの実例にいくたびか遭遇した。一昨年冬、集英社文庫の新社刊、熊谷達也『山背郷』の広告が讀賣・毎日の両新聞朝刊(2004.12.16)にのり、讀賣には「直木賞・山本周五郎賞ダブル受賞作『邂逅の森』の原点!」、毎日には「直木賞・山本周五郎賞W受賞作」とあつた。ちなみに、前者のその行の下には余白が

あり、後者には余白がなかった。

昨秋、恩田陸『ネグロポリス』の広告が朝日新聞朝刊(2005.10.16)にのり、『夜のピクニック』で、本屋大賞と／吉川英治文学新人賞をW受賞!』とあつた(斜線は改行箇所。以下同じ)。これにも行の下に余白がない。紙幅によつて「ダブル」になったり「W」になったりするようだ。ちなみに、集英社文庫本の帯には「ダブル受賞」とある。

昨年二月、韓国映画『大統領の理髪師』の広告が夕刊讀賣新聞(2005.2.4)にのつた。主演女優の写真の一部を丸い白抜きにして「第17回／東京国際映画祭／女優秀麗賞と監督賞／W受賞」とあつた。W受賞は他の二倍以上の大きさである。

この春は書籍自体にも見たし、話しことばのそれにもあった。角川書店の恩田陸『ユージニア』の帯に「祝W受賞」と振仮名付きで印刷しである。「祝」は円で囲まれた白抜き文字である。書籍以外の例では、今春、ミニストップが店舗の外に掲げた大広告の「NEW! Wスーパー」がある。ここには再現しようがないが、Wの上に「ダブル」が重ね刷されているのである。これらは誤用の普及に大きく貢献している。また、「ラジオ朝一番」の

「ビジネス展望」で、かねて敬服していた経済評論家がワールドカップのことを、二回「ダブルハイ」と言った(523)。

朝日新聞朝刊(2006.4.23)の別刷“pe on sunday”は、「技あり」と題する記事に、三菱電機が開発した、足元の温度も感知するセンサー付きのエアコンディショナーを紹介した。その商品の写真には「ダブルで見はる/Wムーブアイ」とある。三井住友銀行の広告には「Wキャンペーン」、小田急の電車には「6月だけ1人冷やすとW特権(トクベン)の広告があり……、もうやめよう、きりがない。

これらの広告、商品名、そしてテレビのニュースに出現した「W」はダブルを意味するらしい。これは今に始まったことではない。酒場の品書きに「ハイボールW」をみることもあったし、洋服の生地にも「W巾」もあった。それが、今、大新聞、大放送の報道に広告にみえるし、文筆をなりわいとする人もこれを使うのである。

このごろの生活でWの文字が最も頻繁に出現するのは、インターネットのホームページのアドレスの“www”で

あろう。三つ重なったWを人々はどう読んでいるかと気にかけていて、耳にとまった幾つかを紹介しよう。

二月十九日の「地球ラジオ」の放送で、アナウンサー二人の読み方は、いずれも「ダブリユ、ダブリユ、ダブリユ」、初めの二つを短呼し、三つめだけを長めに読んだ。多くのアナウンサーの読み方もこうである。Wの日本語としての標準的な読み方が「ダブリユ」であることは言うまでもない。だが、日本人は特に「WC」を口にするとき、Wを「ダブリユ」とは言わなかったように思う。たいはい短呼したのではなからうか。Wを三つとも丁寧長呼すると、いかにも間延びしてきこえる。五月四日夕方、FM放送「今日は一日モーツアルト三昧」で、松田輝雄アナウンサーは「ダブリユ、ダブリユ、ドット」と一つ落とした。その気持ち、わかる。「ダブリユ」が本来の読み方であると知って短呼するのは自然な発音だといえよう。わたし自身は意識して三つとも長呼するが。

昨年十二月八日、「ラジオ朝一番」の七時少し前、女性アナウンサーの発音を、わたしの耳は「ダブル、ダブル、ダブル」と聞きとった。今年の二月十四日と四月廿一日の夕方、四月廿四日の朝、FM放送「ミュージックプラザ」

の進行役の発音も同様に聞こえた。この二人による四つの事例が確かに「ダブル」だとしても、驚くにはあたるまい。既に日本放送協会は、看板のニュースの標題にダブルの代りにWを用いているのだから。ちなみに「ミュージックメモリー」の今陽子さん、「気ままにクラシック」の鈴木大介さんは、三つとも明瞭に「ダブリュー」と長呼する。

もしかしたら、英語圏ではWを“double”の意味で用いて「dab」と読むことがあるのに、無智な自分が知らないだけではないか。英語圏での生活経験がないわたしは自信がない。数点の英語の辞書を練ってみたが見いだすことができなかった。過ぐる一年間たまたま米国西海岸で生活した愚息に尋ねてみた。彼からは、そのような用例には接することがなかった、そういうときは「D」を使うようだ、との返信があった。

嵐山流は姿をかえて復活した。全国書店のネットワーク「e-hon」は、ホームページのアドレスを組織の名に用いたものである。インターネットによる座席予約を「e席リザーブ」と称する映画館もあり、「e」は“electronics”の頭文字と日本語「いい」を掛けたのだろう。類例は「eコ

レクト」「eコマース」「eトレード」などと多い。パーゲンセールの商札の「e-price」は“economy”のつもりだろうか。だが、これらは商品とその周辺の遊びに過ぎない。

遊びは真剣な世界にも広がる。朝日新聞朝刊の別刷“pe on sunday” (2005.2.5) で見た、炭焼き体験の記事の見出しの“& eat e”は、中学生のケータイの画面さながらである。それらに輪をかけたのが岐阜市の「広報ぎふ」(2006.3.15) の表現である。その第一面、男女共同参画室が市のホームページを紹介する記事の見出しは「男女のeー未来をスケッチ！」。これで何かしやれたつもりなのだろう。

韓国映画の広告にあった「&」、それに「in」「vs」はもう珍しくもないが、なんのためにこれらを用いるのだろうか。この夏、日本放送協会のテレビ番組「叫田苦楽をさへや書 in じ書 2006」もあった。卒業論文の日本語の中で“vs”を使った学生に、口述試問のさいに読み方を尋ねて、知らないこと返されたことがある。衆議院議員の千葉県第七選挙区の補缺選挙に関して、朝日新聞朝刊(2005.4.16)は、第一面に「小泉 vs 小沢初の舌戦」の見出しをつけた、律義にピリオドまでつけて。

英語学習の入門期、アルファベットの指導場面を想像してみよう。A、B、Cと続くそれらはみな一口で発音される。一音節語だからである。だが、U、Vに続くWに至って、それが一口では発音できないことに子供たちは気づくはずである。そこで教師はそれがダブルユー (double U) であることを教える。教室にそのような光景が実現して当然である。それを指導しない教師は怠慢と批判されてもやむをえないだろう。譬えていうと、いろは歌を教わる子供たちが、イ、ロ、ハと読んできて、ユ、メ、ミンとなったら、「あれっ」と思うに違いないのだから。

Wを“double”の略語と思いこんでいる日本人の多いことは、入門期の英語教育の性急さを語るのではない。アルファベットをきちんと学習していたら起こりえないことである。日本の全ての小学生に英語を学ばせることが実現したら、いよいよ性急にして浅薄な英語教育が広がりはしないかと、わたしは案じている。

京都大学文学部の同窓会誌『以文』の四十八号 (2005) に、内山勝利名誉教授の「六〇の手習い」というエッセイがのっている。還暦すぎてバイオリンを習い始めた内山さ

んは近くの古道具屋で偶目したバイオリンを購入した。その胴の内側に貼られたラベルによると、なんと千七百九十九年製のストラディヴァリウス、銘は“STRADIVARIUS”とあった。ところが、前の持ち主は「ヴァ」がVAではなく、UAとなっているのを「誤り」と思っただけになったのか、Uの字をキリの先か何かで引掻いて、消えがてにこまかしてあった」。

ラテン語 (ローマン・アルファベット) にはUとVの区別がなかった。これが分離するのは十八世紀後半であることこそ知らね、フランス語のアルファベットのWが“Double Ve”¹⁾とよばれることは、初級フランス語の教室で最初に教わる内山さんによると、ストラディヴァリウスがラベルにVAの綴りを用いたのは、九十歳をすぎた最晩年のわずかな期間だけであって、名人の腕が最も冴えた千七百年代後半から二十年代は専らUA綴りであることが、たいていのヴァイオリン書に出ているという。

本稿をまとめている段階で接した三つを加えておこう。

朝日新聞の東京本社版朝刊 (2008) 第二面に、「北極異変」と題して米国アラスカ州の環境変化を報ずる大きな記

事がのつた。見出し「辺境Wの脅威」のWは“world”の意味かと思つて読むと、「温暖化 カリブーは減り続ける」「油田計画 くすぶつて四半世紀」の副見出しもあった。このWは「二つ」の意味らしい。

読賣新聞の中部支社版(96)第十七面「大盞盤 第五回 2006年」の記事中、大見出し「W昇進へ再挑戦」がわたしには理解できなかった。二枚の写真と副見出し「白鵬と雅山 重圧との闘い」によつて、このWが「二力士」の意であることがようやくわかつた。東京本社広告局の制作した全面広告である。

東北本線福島駅でみた掲示(925)「2枚つづりの回送券/Wがうさぎ」のWに、「ダブル」が重ね刷りしてあつた。

この実態を記述した辞書は意外に少なく、管見では『学研国語大辞典』(1978)、『新潮現代国語辞典』(1985)の二点のみ。前者は「ダブリュー」の項に、「④〔俗〕ダブルを表す記号」として実例三つをあげている。この国では今、誤用に発する俗語がかくも堂々と幅を利かせているのである。(二千六年秋)

龍門石窟古陽洞の開鑿年代(上) 正誤表(改訂)

「成城文藝」一九五号掲載

誤

2頁上段2行 西戒の地

〃 〃 19行 龍門石窟前所長

〃 〃 〃 劉景龍氏訪問

3頁上段5行 六朝の表現

4頁上段11行 こう呼とも

4頁下段5行 「太和七年龕造

佛記」にも

6頁上段1行 唯那

6頁上段7行 分れている

8頁下段10行 塚本靖によって

9頁下段3行 が大部分を占め

10頁下段4行 六朝の伝統

11頁下段7行 六朝時代の

11頁下段10行 六朝文化

11頁下段13行 晋代以来の

正

西戒の地

龍門石窟研究所前所長

劉景龍氏の訪問

〈漢風〉的表現

こう呼んだとも

「太和七年龕造佛記」

②)にも

唯那

分れている

明治三十九年(一九〇

六)に塚本靖によって

で占め

西晋以来の伝統

西晋を継承する東晋以後

の六朝時代の

漢人文化

洛陽における西晋以来の

12頁下段1行 捧げたと思う

14頁下段18行 孝文帝崩御後に

15頁挿図8 東山より下流の

〃 下段9行 瓦葺の南葺

〃 下段16行 差支えであろう

15頁下段19行 南朝斉の南洛郡治

17頁下段14行 裳階もじろ

19頁上段14行 淨瓶

〃 〃 17行 〃

〃 下段2行 であるが

21頁上段3行 アットリビート

21頁上段6行 六朝の表現

23頁上段6行 六朝藝術ならではの

23頁下段3行 太和七年(四八三)

25頁上段14行 交脚像である。

26頁上段16行 説説印

29頁下段4行 強靱

32頁下段17行 『新旧約聖書』

34頁上段11行 雲岡窟

36頁上段7行 バクダット

捧げたいと思う

北魏の孝文帝崩御後に

東山より上流の

瓦葺の

差支えないであろう

南朝斉の南陽郡治

裳階もじろ

宝瓶

〃 〃

であるが

アットリビート

〈漢風〉的表現

「漢風」ならではの

(四八六)

交脚像であり、

説法印

強靱

『旧約聖書』

雲岡石窟

バクダット

36 頁下段 16 行 弘文帝

孝文帝

37 頁下段 5 行 帔巾ひき

帔巾ひき

38 頁下段 17 行 第二八五窟窟頂の

第二八五窟窟頂の

38 頁上段 挿図② 天地が逆

39 頁上段 5 行 麻尼

摩尼

々 々 2 行 密賓陽中洞

賓陽中洞

々 下段 7 行 華著あり

華奢あり

々 下段 16 行 キーヅル

キーヅル

41 頁下段 2 行 (田稱)

(田稱)

々 下段 2 行 E・シヤヴァンヌ

E・シヤヴァンヌ

々 挿図② E・シヤヴァンヌ

E・シヤヴァンヌ

龍門石窟古陽洞の開鑿年代 (下) 正誤表

「成城文藝」一九六号掲載

誤

正

3 頁上段 9 行 白居易伝よれば

白居易伝によれば

8 頁上段 14 行 景明二年造像銘

景明三年造像銘

9 頁上段 8 行 高七八十五尺

高さ八十五尺

9 頁上段 12 行 龍門訪問より三年後の

龍門訪問より二年後の

9 頁下段 16 行 嘉靖元年 (一五二二)

嘉靖元年 (一五二二)

11 頁下段 2 行 平子鐸嶺について

平子鐸嶺について

11 頁下段 10 行 (横幅一六・五センチ、

(横幅一六・五センチ、

縦二〇・五)

縦二〇・五センチ)

14 頁上段 5 行 太和十七年 (六九三)

太和十七年 (四九三)

20 頁下段 1 行 《龍門碑銘三七三、Estan-

《龍門碑銘》三七三》(第五

2 行 paze328 (Fig. 540 et 1506)

三九図、第一五九七図)

20 頁下段 6 行 托弧内に

托弧内に

20 頁下段 11 行 (第五四図、六〇五図)

(第五四図、第一六〇五

28 頁上段 22 行 審陽洞

審陽洞

図) 賓陽洞